



13  
2772



結 へ 13  
2972

門 遠  
清 1941  
卷

好口

好口

好口

八 13  
2772



南驛夜光珠下之

彙齋主人



○却説日星移り斗轉して藏福  
寺の鐘聲四更を告斗六景  
りの光景頗る変化して  
三絃閑暇を給て部屋下り  
燭臺役を行燈を譲りて非  
番となす賓客を食應を

調度の器具ハ山の神の麻毛  
配子追斗そナシ後なるび臺  
所子籠りて通夜を遂了後  
者多し雖席上子さハぐ  
長坐子弟ハ仲居ケ皆席子  
掃出さそして紙屑とおろく

狼狽ほりり 竟小仕切 屍風の  
陰小潜むこれに 裡穴棘入の未至  
通ハ狐りうへの待倦なるを  
悟らま 猫撫聲の自前勤ハ  
嵐とくまの初心なるを 搔の  
めまらちあんどかくおれしりき

妖怪の幽棲四面八方寂々  
冥多くるる左側ひりたのる夢  
小麗斗してや 忽然と目を覺  
しるる客あり

正六

年四十をうり 其のちちり 中山一蝶ヶ山口ヶ高慢  
し 辨尾田五郎ヶ九太夫の心底とを 當り調合し  
こまがこころ内を出るとき 衣服の糸入とらん 綿の綿  
入よつや 老くるるさ人留のちを 羽織るまこと 中途中

やまき人のもとをたのこて綿入ハ革編を着しゝおりのハ  
 藍運一の石懸小もんをちりめんをくしつるさきども  
 衣裳と人物相應せぬ外見えなまをどけく是別人  
 専ら商家の執權職よりて金銭をこころしつるも  
 湯水もむとせんんもふ益のうちハ同ドもけの友達  
 福荷の芝居見物せしが路考の娘道成寺がまきるやいふ  
 比地ハ駕籠までをさしらすまばらふど火とせしひるり  
 そまより四つばとおやしき時紋までを種を子に分譲おやま  
 もらふをつけてつるるとも借よをぬさふこころに奪同のこ  
 なまの物惣花をとりしゆく至極の上へけして大派をるりか  
 おく嘔吐の催しちどりて干豆米のたてくを一向正  
 体るまわりてぬ小器くおとらきいろくぬ抱りて床のち  
 四十八

へけりこころやまきをせける小やうぐ 覺しとらるがえ未 酒の  
 ましめる大病るまばいまた平せふらるこころやうぐ 起す  
 正 アリ ぶら時 ぢ アリ ト ちるむと背のびと  
 一度よりてあつら  
 をりまきともおろのおやはおび行燈のむらうらうら  
 くらふてるぬをい盃の火いりきししやうらうらくるたれ  
 ちこしあつとすまきともおろあけさふらふこととちるぢ  
 まよめんどのわかきたかけきいれしと塩茶下 運命教  
 がとぬてあることといふらうらうらとてまき 工、 ころやア  
 茶とんをとりてむとらうのく種をまき  
 んとしよ茶でやアむらうく 一トむせうまき  
 をくくく

おくるのおやま徳丸  
として隣よしと仰ぐもの

**折枝**

年のころの二十どろを背恰好  
いぶんあつく髪友ははやくまう

ちよとちつこまつつけおつふせふて白のツルキをうら  
前ぐこのおやまへおつるやうまう一だりちりげひゆもあといふ  
何んぞんちり本ハ丈夫のころをそよあまき淋まら何んぞん  
津黄徳面のちごま前少く太さう小襟びまげくうふん  
着の袖入ををぬりぬふらそわをこたてまおてとら  
流るるそまをい色白くまふぶらうよして威あつて極  
くしげこのおやまへこのうちの人金箱ホーと願ふて何  
つああぶこのちりまうむらと正にがまうとこのおやまへ  
むらうよコレとむどい破ちやつるふもあて  
まうら

四十九

めいりふー **正** ちんてやさめいり服を

彫ありさめいりまうやアためいりが

名人下やおまむいそめとけ茶ハあん

てや一 **折** 花のまが

おやふりや **正** 延命散ちやうふ **正** 花

まが又あせしよあるまうん **折** ホニ







だしなまおまへむいしんおひで

あたる申志まふくおしとりを正

ヲツトよしくトころまらけふの女里

さやうあふ進解トりあて出や何とまて正さ

まのうい部いの名りてをよむ正なるぢや王冠成肉そ

折枝さぬまふいもあともかこい

ふん志よりあいのうなるみよま

よんで見よふト

一廻りまあまらやけ

いふあいおまは

いーはちあせかのけあのみ

しあまのあち

おはつたえし句にあつたはつた

年つたはつたえし句にあつたはつた

ねとよせんし句にあつたはつた

かたしつたはつたえし句にあつたはつた

らつたはつたえし句にあつたはつた

きつたはつたえし句にあつたはつた

世

おはつたえし句にあつたはつた

かたしつたはつたえし句にあつたはつた

らつたはつたえし句にあつたはつた

おはつたえし句にあつたはつた

かたしつたはつたえし句にあつたはつた

おはつたえし句にあつたはつた

かゝる事なるる事  
まゝにまゝにまゝに  
ふかふかおしやう  
あつちまゝに  
そまゝに  
まゝに

十一

く病るもの  
あつちまゝに  
まゝに  
あつちまゝに  
まゝに  
あつちまゝに  
まゝに

十一











氣がむいせう下りし  
さまが又よほめしむれど

まのぢんちんあ

折

たふちうしーがちいおるぬい

ちんちんがあひがきんおんちん

んせん

正

ちんでや

折

外のいし

てとちんが妹ふまはけぬいふ

うんてあゝ通りのはぢやうく

七十九

ふま〜おんちんも新田のちん

おとゝめのお三女世んぐちん

ちん〜おまへんがおんちん

〜ちんちんちんちん

〜ちんちんちんちん

相談 ちんちんちんちんちん

形一新田の人さん今いふやをり  
久一いお出る人まも申とせん  
以永<sup>そい</sup>海<sup>うみ</sup>を<sup>を</sup>のおつさんのおるん  
るまじい<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>が<sup>が</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>月<sup>つき</sup>  
乃<sup>な</sup>う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>ふ<sup>ふ</sup>度<sup>ど</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>る<sup>る</sup>く<sup>く</sup>ものほ<sup>ほ</sup>ふ  
お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>せん<sup>ん</sup>申<sup>ん</sup>も<sup>も</sup>諸<sup>もろ</sup>ふ<sup>ふ</sup>心<sup>こころ</sup>が

由<sup>よし</sup>か<sup>か</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>し<sup>し</sup>お<sup>お</sup>い<sup>い</sup>  
お<sup>お</sup>あ<sup>あ</sup>ご<sup>ご</sup>こ<sup>こ</sup>し<sup>し</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>内<sup>うち</sup>か<sup>か</sup>や<sup>や</sup>い<sup>い</sup>な<sup>な</sup>い  
や<sup>や</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>氣<sup>き</sup>め<sup>め</sup>ど<sup>ど</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>や<sup>や</sup>が  
ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>一<sup>一</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>周<sup>かん</sup>環<sup>ゆわん</sup>と  
こ<sup>こ</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>ふ<sup>ふ</sup>家<sup>いえ</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>目<sup>め</sup>は  
う<sup>う</sup>く<sup>く</sup>物<sup>もの</sup>と<sup>と</sup>ふ<sup>ふ</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>お<sup>お</sup>い<sup>い</sup>し<sup>し</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>と

ちり〜あま〜い〜がゆめうも  
うちあ〜おんま〜かほ〜  
にま〜あ〜おんま〜  
し〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
—カ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
てあ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

24

めを〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
このあ〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
性〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
ひのま〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

んも床へ入るうういともあつり  
う其場のほんをひききうう  
申おまへふともいひまへ  
三あふふ持あうせもあつ  
であううやうとあやふもあふ  
たづづぶがるふでるふり折ソレデモ

三十一

あんまり勝あつていともあつて  
お見えげあんとあやうが正十二お  
まへもあやうふかまをあつて  
もあつてもあつてアせんあつて  
あつてあつていひのあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつて

以なまろちうけいあるといふ島端心の  
おきいといふちがらふ申おまぐりの  
はとあるまゝのちがらふいともあり  
あゝいともありと昔男中乃  
諸君けはさめり春さんでおる  
来るのハ何ぞぞぢやのあゝおまぐ

142

がをち我もせよまゝも同之町ぢや  
昔いぞいぢうらもお後をせうら  
何ぞいぞ何ぞいぢうらもお後を  
がえい トぬるまゝの一言よりむせふ色男といふま  
きざしふらうてらをいひて人我いをい  
おまぐりのいぢうらもお後を  
おまぐりのいぢうらもお後を

折









アトサ  
又おらんなるしをさひいあんま  
しやモウひやぢやうふそをせ  
ふおもをらんせむとひとりの  
やふもぞあるをせしお出る  
なおむしにそむかへおらん  
のハサトハんにあむしりぬる鳥

鳥

ふつふ〜きよも〜がおる世に  
お高なるより内におうけ  
らう〜が具しやをきふ〜と  
みなんあ〜も親父がわづら  
ておる申〜と下る急よハ内  
ぬや〜とでや折おふ〜

折





しものいしゆに申下やいしもが  
おぼふらむんはあつふらば両親  
も苦子をさうけどもおぼふとやととも  
女房少るつゝあつふらふと  
今夜くく来るとも本村下小旗の  
乞食と刀と千世孤一牧力少まきら

けつ空海くありーがををり  
あまに飛越年つて一又をけ  
るがあつふらむの鉄をさあつ  
あつふらむせむのばるぬものを親  
父の心をさういて儲けらまー金銀  
をさうーげもあつふらひ拵おつら

が夜の月めも宿寐をさしつら  
るし着物を曲てまふやうあふ  
こしをいかにしせびとあか  
のそふせうと日影静くあつけれ  
し其意無き今ふそし免ぬと  
さうふあふふ山よりもいづれ

折

うしをぬりしついで  
あやうらんくあつた  
つせし名々の冢もおそ  
ふつせ穴そまふと  
くやんでふなふ

折 袖



らんやぎうて高たかがモウ だめふーあ

**折** まさうきふしじちんまもとろせう雁雁

もあうまぬやうあを靴ふるりて未

練せんがおころいふ鳥鳥 ソリヤ コーもおな

ーおもぞちをいししおくこまをぬが

あふしーおのお間まあやぢのよてまあ

せいの

もソ首しゅ展てんがうあまう内ないへんくえん

おまのまんせりなをまあーしてど

ふがかああのおははももてまのやら

いさふさうまぶちちおおいいままてていい

のぬうらむいぬいーいふらーて

おるがるふてまあふらまふいりあふ

のちひておまへももるゝておひ  
とまをりさうらふれ質<sup>しち</sup>物<sup>もの</sup>を<sup>を</sup>取<sup>と</sup>度<sup>ど</sup>  
ぬバ何<sup>なん</sup>じとをも増<sup>くわ</sup>が何<sup>なん</sup>ぬちん<sup>ん</sup>金<sup>かね</sup>  
がかりのほせといけせのあまの何  
しりま<sup>し</sup>ハ折<sup>を</sup>其<sup>の</sup>金<sup>の</sup>まの<sup>こと</sup>よつ  
て<sup>も</sup>ん<sup>ち</sup>夜<sup>の</sup>かろ<sup>が</sup>ま<sup>ん</sup>ど<sup>金</sup>ま<sup>を</sup>持<sup>つ</sup>

ておの娘<sup>むすめ</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>速<sup>た</sup>く<sup>く</sup>申<sup>ま</sup>お里<sup>り</sup>  
うん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>後<sup>ご</sup>て<sup>て</sup>う<sup>う</sup>お<sup>お</sup>な<sup>な</sup>こと<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>  
らり<sup>ら</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>ハ  
せ<sup>せ</sup>く<sup>く</sup>世<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>ち<sup>ち</sup>か<sup>か</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>質<sup>しち</sup>物<sup>もの</sup>を<sup>を</sup>  
け<sup>け</sup>お<sup>お</sup>あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>ち<sup>ち</sup>び<sup>び</sup>と<sup>と</sup>よ<sup>よ</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>が  
あト<sup>ト</sup>最<sup>さい</sup>前<sup>ぜん</sup>正<sup>せい</sup>六<sup>りく</sup>よう<sup>よう</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>三<sup>さん</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>金<sup>かね</sup>子<sup>こ</sup>を<sup>を</sup>鳥<sup>とり</sup>朝<sup>あさ</sup>  
小<sup>こ</sup>涙<sup>なみだ</sup>し<sup>し</sup>も<sup>も</sup>免<sup>めん</sup>妹<sup>いもうと</sup>の<sup>の</sup>作<sup>し</sup>た<sup>た</sup>もの<sup>もの</sup>を<sup>を</sup>後<sup>ご</sup>





いりたな鳥 **鳥** せふでやあふふしは

かむがしぬり **折** フ、ふとト

朝子まろ **○** 井きふらきく正ハ

あふい伸を **○** あいハ鼻屎を

達テ大町の望 **○** 天井板も

けむ未便 **○** けむ未便

七十

やうきを **正** ア、お枝の

さん **正** ぞふ

盗人 **里** 盗人

又由 **里** 盗人

が、ろちやな**正**ふぐ、ろちやな  
さほ、ろちやな、ろちやな、ろちやな  
がつくと、容の金、ろちやな、ろちやな、ろちやな  
おやほ、ろちやな、ろちやな、ろちやな、ろちやな  
ん、ろちやな、ろちやな、ろちやな、ろちやな  
な、ろちやな、ろちやな、ろちやな、ろちやな

正

せうが、<sup>ト</sup>自<sup>シ</sup>分の<sup>ノ</sup>もの、よな、よな、よな、よな、よな  
ゆ、ろちやな、ろちやな、ろちやな、ろちやな、ろちやな  
もの、よな、よな、よな、よな、よな、よな、よな、よな  
あ、ろちやな、ろちやな、ろちやな、ろちやな、ろちやな  
ろちやな、ろちやな、ろちやな、ろちやな、ろちやな、ろちやな  
ろちやな、ろちやな、ろちやな、ろちやな、ろちやな、ろちやな  
ろちやな、ろちやな、ろちやな、ろちやな、ろちやな、ろちやな

正

まはちつてやうがゆめあぐん飯賣  
女ハ朝比奈が島めぐりのうちまは  
みぢきいぬりハ茶屋のからまがせ  
日るみ力代のほろ宮深ぐりをうら  
アせほろー夜めたーいめやう  
はぐーいーあふがらんまうさうー

かづ騰キナヒがでんぐりちつて心太店のあ  
くぐりの玉ふやこいきあきれが袴  
着て稲荷のサエ居下口よを述のぶるハ  
くろくまーくトそぎりりえんあひと里マは  
づちつとおまづふおれでいざあも正  
お羽てでも真羽までもおこぞとぞやあふ

ハげ仲居のどめざりなりまめれこ

まなましやアズきトリをてお里をつまんと  
まじれめのみまねを

鳥朝とおれ枝が宿ておるまを目づけつけ  
おまーがひりいけん正はうちるうがまほをえ  
るまうりまを

鳥朝 鳥朝 今のハたー

くふ 作者曰 おうちれおらんとうでせいぞ

つとま

南陌翠平楊柳 ヨ集齋子着 完

倡融通一覽 同ノ別 完

右とみ追て珠委諸品出来

竹のる清覧のり

丹果

是の増井領

蔵屋伊たきんが述懐曰

城買ころり帛席買が後

しをやふのみ 馬呼 互共

所城乃突は迎隣頼ゆの

雄おとこ子こ多おほくるるややくく天てん人じんにに論ろん毒どく  
みみ比ひくくるる毒どく子こ多おほくるるややくくののと  
正ただれれ跡あとくくはは度どをを不ふ積じく  
如ごとくく意い力りき傲おご慢まんをを心こころ成なりす  
身み大おほ冊さつがが燈とうをを照あららせせしし也や  
八はち十一じゅういち

目め黒くろ乃なり比ひ翼よく壞くわいすす難なんんんくく  
終つひ身み成なり行ゆくくはははははは子こ尚なほのの  
かかくく頃ころ不ふ定ぢやうふふ是こゝ系けいをを系けい  
々々亦また光あかりのの珠たまご乃なり光あかりををととんん  
ききららそそ撥はくるる湯ゆのの等らうがが迷まよひひ

たてえし一才先の書  
うきやんやまのそとまを  
がね色の紙紫女が源氏の  
五十四指躰や取はく城  
張るるしは被はるんが  
八十四

形く頭ん教人遠き  
うきやんやまのそとまを  
うきやんやまのそとまを  
みまへて識寸者多  
な四井山人





五

五

三



五



吳光祥

文行六集

傅馬

京口屋九八郎